

受け継がれる美

2025年

10月11日(土)～

2026年 2月1日(日)



展示目録

都合により展示の内容を一部変更することがあります。作品目録のNoは作品の並びと異なります。

No	作品名	年号	和暦	年齢	サイズ	号	材質
1	自画像	1925	大正14	20	30.5×22.0	3F	油彩・キャンバス
2	風景	1920年代			24.5×33.5	4F	油彩・キャンバス
3	三岸好太郎「風景」	1931頃	昭和6頃		31.8×41.2		油彩・キャンバス
4	三岸好太郎「海」	1933	昭和8		32.0×41.0	6F	油彩・キャンバス
5	花・果実	1932	昭和7	27	90.0×72.0	30F	油彩・キャンバス
6	もや	1937	昭和12	32	60.0×72.5	20F	油彩・キャンバス
7	室内	1940年代前半			162.3×97.0		油彩・キャンバス
8	静物	1943	昭和18	38	60.6×72.7	20F	油彩・キャンバス
9	花	1950年代			64.2×41.2	変15M	油彩・キャンバス
10	花	1951年頃	昭和26	46	52.8×45.6	10F	油彩・キャンバス
11	鳥と琴を弾く埴輪	1957	昭和32	52	97.0×130.3	60F	油彩・キャンバス
12	小林和作肖像(尾道にて)	1950年代	昭和20～30頃		39.5×36.5		鉛筆・紙
13	飛ぶ鳥(火の山にて)	1962	昭和37	57	116.7×91.0	50F	油彩・キャンバス
14	朝がきた(ヴェネチア)	1971	昭和46	66	90.9×72.7	30F	油彩・キャンバス
15	大運河にて	1973	昭和48	68	60.6×73.0	20F	油彩・キャンバス
16	細い運河	1974	昭和49	69	92.0×73.0	30F	油彩・キャンバス
17	雲と海の対話(夕焼)	1975	昭和50	70	65.1×100.0	40M	油彩・キャンバス
18	ブルゴーニュの麦畑	1978	昭和53	73	92.0×65.0	30P	油彩・キャンバス
19	トネールの白い川	1980	昭和55	75	130.3×97.0	60F	油彩・キャンバス
20	小さな町(アンダルシア)	1987	昭和62	82	89.0×116.0	50F	油彩・キャンバス
21	アンダルシアの町	1987	昭和62	82	73.0×92.0	30F	油彩・キャンバス
22	イル・サンルイの秋	1987	昭和62	82	89.0×116.0	50F	油彩・キャンバス
23	白い花(ヴェロンにて)	1989	平成元	84	73.0×92.0	30F	油彩・キャンバス
24	三岸黄太郎「祭りの日」	1982	昭和57		90.0×90.0		油彩・キャンバス
25	三岸黄太郎「あらし」	1986	昭和61		90.0×90.0		油彩・キャンバス
26	荻須高德《ルールック運河》	1957	昭和32		54.0×65.0		油彩・キャンバス
27	自筆原稿「天才」原稿用紙3枚						
28	三岸好太郎 三岸節子宛て書簡、1925年頃、原稿用紙1枚						
29	荻須高德 三岸節子宛て葉書、1955年1月2日付						

三岸節子 装丁書籍

『佐多稲子作品集2 牡丹のある家』佐多稲子、1947(昭和22)年、筑摩書房

『若き葡萄』中里恒子、1955(昭和30)年、河出書房

『歌集 山の陽』吉村いと、1957(昭和32)年、新星書房

『離情』円地文子、1960(昭和35)年、中央公論社

受け継がれる美

三岸節子は、最初の師である岡田三郎助の他、夫・三岸好太郎を始めとする芸術家から、美とは何か、芸術とは何かを学んでいきました。受け継がれていった美について、作品から読み解きます。

岡田三郎助

洋画家になることを目指し、16歳で上京した節子が最初に就いた師が岡田三郎助(1869-1939)でした。節子は、岡田が主宰する本郷洋画研究所と女子洋画研究所に通い、本格的に洋画を学び始めました。翌年には岡田が教鞭をとる女子美術学校西洋画科の2年に編入し、岡田の描く「気品のある絵」を目指して画業に打ち込み、美の真髄を学び取っていきました。後に節子は同校を首席で卒業しています。

三岸好太郎

三岸好太郎(1903-1934)は、札幌から上京し独学で洋画を学んでいましたが、1923(大正12)年春陽会の第1回展でデビュー、翌年には春陽会賞を首席受賞し天才と評されていました。節子は、美術学校3年次に同じ展覧会に出品していた好太郎と出会い、1924(大正13)年、節子が19歳で美術学校を卒業した年に結婚します。才能溢れる好太郎との生活は、節子に画家としての生き方を教えると同時に、妻としての苦悩も与えるものでした。芸術の源を恋愛に求める好太郎の奔放さに節子は苛まれ、また貧困の中、家族の世話に追われて絵画の制作をできる時間も満足に取れなくなっていました。そんな生活が10年程続いた1934(昭和9)年、好太郎は旅先で体調に異変をきたし、31歳の若さで急逝してしまいます。好太郎が没してしばらく後に、彼の遺作展を思い立った節子はこう語っています。



1932年、好太郎と節子、北海道工業試験場野幌分場にて

今まで私は謙譲な心で、不安をこめて、彼の仕事をみつめてきた。次から次へと豹変する彼、世間はけっして彼の味方ではなく、彼は変貌のたびごとに多くの非難の集中を浴びた。

しかしこの残された唯一の肉体はこの絵画のなかにある。このすべてが彼の血であり肉なのだ。今私の前に彼の絵画がすばらしい生きものとなつて呼吸をしてゐる。興奮の渦巻である。*

好太郎の芸術は、彼の肉体が無くなった後も、絵画の中に生きているという節子の強い信念が伝わってきます。

荻須高德、小林和作ら同時代の芸術家から

節子は20歳のときに春陽会でデビューした後、27歳で好太郎が創立メンバーの一人である独立美術協会に移り、その後1939(昭和14)年に佐藤敬の勧めで新制作派協会の会員となりました。同年、パリで活躍していた画家・荻須高德(1901-1986)は戦況悪化のため一時帰国を余儀なくされ、新制作派協会に会員として迎えられます。節子は同郷ともいえる稲沢市出身の荻須を画家として尊敬しており「愛知県からはすぐれた器量の画家は少ない。荻須さんが同じ生国だといふことはひそかに私に自信をつけ喜ばせた。」「*2と述べています。

節子と交流をもった画家の一人に小林和作(1888-1974)がいます。小林は山口県から上京し春陽会で活躍していましたが、1932(昭和7)年、実家が破産すると尾道に隠居し、独立美術協会に移ります。戦前から戦後にかけて節子は小林と交流し、尾道転居後も小林が中央画壇で認められるよう働きかけていました。デッサン《小林和作肖像(尾道にて)》(No.12)は、そんな交流から生まれた作品で、素顔の小林が節子の手によって描き留められています。



1957年頃、小林和作と節子、尾道にて

三岸黄太郎

節子は1954(昭和29)年、念願だった最初の渡仏を果たした後、1968(昭和43)年63歳で再びフランスに渡り以降20年程を彼の地で過ごしました。その際、長男の黄太郎一家も一緒に移住し、フランスでの生活をともにしています。三岸黄太郎(1930-2009)は高校時代から絵を描き始め、やがて自身も画家となり新樹会や個展を中心に発表を重ねました。1974(昭和49)年にブルゴーニュ地方のヴェロン村に転居してからは、深いブルーを基調としマチエールの表情に富んだ独自の風景画を展開します。節子は黄太郎の作品をして「ブルゴーニュそのものを絵の中に伝えているんです。私にはああいう絵は描けないですね。」「*3と高く評価しています。黄太郎は、好太郎と節子という二人の画家の美の精神を受け継ぎながらも、独自の作風を作り上げていきました。

*1 「おもひ出」『美神の翼』求龍堂、1991年、106・107頁

*2 「荻須高德さん」前掲書、177頁

*3 林寛子『三岸節子 修羅の花』講談社、1989年、21頁